様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２０２６３

研究課題名（和文）ロシア進出前後の中央アジア社会に関する歴史地域学の試み

研究課題名（英文）Historical Area Studies on Central Asian Society during the Periods of Russian Advancement

研究代表者
塩谷　哲史（SHIOYA, Akifumi）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：３０５７０１９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中央アジア南部の定住オアシス地域社会（ホラズム）の存立に不可欠な要素であり続ける灌漑に注目しながら、その地域的特質を実証史学の手法により明らかにすることを目的とした。とくにウズベキスタン共和国のイチャン・カラ博物館蔵 kp. 3894 番文書を読み解きながら、16－20世紀のオアシス内での定住民＝遊牧民関係の変容を、自然環境の変化、ロシア帝国の中央アジア統治の性格、帝国権力と現地政権・社会との灌漑事業をめぐる複雑な利害関係などと関連づけながら論じた。その内容を『中央アジア灌漑史序説－ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡－』（風響社、2014年）にまとめた。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to examine irrigation, which continues to be an indispensable element of the survival of the sedentary oasis region in the southern part of Central Asia (Khorazm), as well as to shed light on its regional characteristics by relying on positivist historical methods. Changes in the relationship between the sedentary and nomadic populations in the oasis region occurred between the sixteenth and the twentieth century. They were discussed in relation to many factors, such as changes in the natural environment, the character of Imperial Russia's rule in Central Asia, and the complex interplay of interests held by the Russian authorities and the local elites/society concerning the irrigation work. Part of this discussion particularly focused on an analysis of document no. kp. 3894, preserved in the Ichan Qal'a museum in Uzbekistan. The content of this discussion was summarised in the monograph "Introduction to Irrigation History of Central Asia".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、東洋史

キーワード：中央ユーラシア史　ヒヴァ・ハン国　中央アジア　アジア史・アフリカ史　ロシア　地域研究　灌漑史　環境史

１．研究開始当初の背景

1991 年のソ連解体を経て、中央アジア地域研究は著しく進展しつつある。この地域研究は、民族問題に始まり水資源（ティムール・ダダバエフ「中央アジアにおける国家間関係と水資源問題」）や独特な経済形態（樋渡雅人『慣習経済と市場・開発』）、企業投資といった、現代的な関心と要請にもとづく課題に取り組んでいる。

また、ロシア語史料や二次文献にもとづき、ロシア帝国辺境の植民地、綿花供給地としての役割を解明することに主眼が置かれた中央アジア近現代史研究は、現地語一次史料（ペルシア語およびチャガタイ語）にもとづく 20 世紀前半のムスリム改革派知識人の思想と活動に関する研究が進むことで、中央アジア・ムスリム社会独自の論理が明らかにされ、ロシア史から独立した一分野としての地位を確立した。近年では、19 世紀後半から 20 世紀初頭を対象に、小松久男のムスリム知識人の改革思想・実践に関する研究、宇山智彦、Alexander Morrison らのロシア帝国の中央アジア統治のあり方に関する研究、秋山徹の遊牧部族首領の権力とロシアの統治のあり方の接合面を探る研究が次々に出されてきた（小松久男「聖戦から自治構想へ」、宇山智彦「個別主義の帝国」、A. Morrison, *Russian Rule in Samarkand*、秋山徹「20 世紀初頭のクルグズ部族首領権力に関する一考察」など）。

これからの課題として、ロシア史と中央アジア史双方の視点の結合、1860 年代後半に本格化したロシアの中央アジア軍事征服に前後する前近代と近代の事例の整合的叙述、中央アジアを構成するミクロな地域の特質解明が挙げられる。

２．研究の目的

本研究は、特定の時期を区切り、政治、社会、経済、思想という要素からなる人文環境と自然環境において一定の条件を共有する地域を、歴史学の手法を用いて実証的に検討し、その特質を明らかにする歴史地域学の試みである。具体的には中央アジアを対象として、ロシア進出前後を時間軸として設定し（19 世紀～1920 年代）、中央アジア南部定住地帯に位置し 1920 年代に入るまで独自の政治権力（ヒヴァ・ハン国）のもとに統合されていたホラズム地方を空間軸として設定し、灌漑、金融、民族、知識人ネットワークといった諸問題への取り組みを通して地域の特質を明らかにすることを目的とした。いわば学際的な地域研究に歴史学の手法を調和させる取り組みである。

３．研究の方法

本研究に取り組む過程で、乾燥地域にあたる中央アジア南部定住社会の存立に不可欠な灌漑を主軸に据えた。灌漑の問題は、1920 年代以降のソ連体制の確立とその後の大規模灌漑開発およびそれに伴う環境破壊、1991 年中央アジア諸国の独立とそれに伴う水資源問題の国際化を経て、現在も中央アジア地域研究の中心的テーマとして取り上げられている。その来歴を中央アジア地域社会の様々な特質と関連づけながら、一方で一次史料にもとづく実証的な歴史学研究の手法により現代の問題を過去に投影しない研究方法を採りながら、議論を構築した。

研究期間中に行った活動は、以下の三点である。

（１）未公刊の一次史料を中心とした関連史資料の収集

本研究課題に関わる一次史料は、中央アジア諸国、ロシア、グルジア、トルコなどの各国の文書館を中心に所蔵されている。とくにウズベキスタン共和国中央国立文書館、同国イチャン・カラ博物館、カザフスタン共和国中央国立文書館、ロシア国立歴史文書館、ロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルグ）写本部、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所、グルジア国立中央歴史文書館、トルコ共和国総理府オスマン文書館などに所蔵されるテュルク語、ペルシア語、ロシア語の諸文書が主要な調査対象となった。またロシア国立歴史文書館に所蔵される、帝政末期ロシア最大の銀行であった露亜銀行の文書の活用は、帝国政府、現地社会双方とは異なる視点から書かれた史料を利用することを可能にし、本研究の独創性を高めることにつながった。

（２）定期的な研究成果の公表

この点については、「５．主な発表論文等」を参照願いたいが、最新の成果について海外の学会で報告したことで、研究関心の近い研究者との討論を通して、研究の方向性を逐次確認・修正できた。

（３）現地研究者との交流

ウズベキスタン共和国ヒヴァ市に所在するイチャン・カラ博物館の研究員カーミルジャーン・フダーイベルガノフ氏や、同国科学アカデミー歴史学研究所の研究員ウルファト・アブドゥラスーロフ氏と定期的に意見交換を行った。今後も研究協力を継続し、本研究を進める上で重要な位置を占めたイチャン・カラ博物館蔵 KP. 3894 番文書（1913 年に現地政権とサンクト・ペテルブルグの企業家との間で交わされた国有地の私有地への移転に関する勅令の写し）についての共同執筆論集を刊行する予定である。

４．研究成果

本研究の成果として、以下の点が挙げられる。

（１）ロシア帝国の中央アジアの軍事征服をまたぐ 19 世紀から 20 世紀初頭の時期において、外来の集団の関与と水資源利用の多角化に伴い、現地社会が独自に水資源の管理を行うことが困難になっていく過程が一貫して見られた。とりわけロシア帝国の中央アジア統治に携わった軍政官たちや中央政府の政策立案者たちに見られた現地社会の灌漑史に対する理解の乏しさは、しばしば現地民の負担の上に成り立つ灌漑計画の実施へとつながり、ときにはオアシス内の民族間紛争の原因ともなった。現地政権は帝国中央・地方軍政官と、現地社会のとくに遊牧集団との板挟みとなり、こうした紛争を解決することはできないまま、ロシア革命・内戦・ソ連体制の成立へと向かったのである。

（２）16 世紀以降の中央アジア（ないし中央ユーラシア）の周縁化過程の中で、19 世紀以降初頭までに個々のオアシス地域においても遊牧民主体ではない定住政権が成立し、定住民の経済力と遊牧民の軍事力との結合の可能性は徐々に失われていった。ロシア帝国の中央アジア統治の開始と、灌漑事業の大規模化、新たな技術の導入の試みは、限られた水資源をめぐる定住民と遊牧民との関係が、自然環境の変化に伴う対立と融和の繰り返しから、両者の恒常的な対立関係へと転換させていく契機であったことが明らかになった。

（３）近年の中央アジア近現代史研究において、ロシア帝国権力と現地社会との相互関係・相互浸透に着目した研究が進展していく中で、両者の過度な調和の強調を警戒する研究者の意見も同時に出されてきている。ロシア帝国権力と現地社会との灌漑をめぐる相互関係を考察していく過程で、両者の非対称な相互関係が明らかになっていった。とくに 1910 年代の土地整理農業総局を中心としたロシア帝国中央政府によるトルキスタン開発計画の立案過程にそれは明瞭に見られる。改革を志向する現地政権（ヒヴァ・ハン国政権）とハン国領内に綿花農園を設立しようとするサンクト・ペテルブルグの企業家たちの利益は一致しており、中央政府が企業家たちの利益を開発計画達成のために犠牲にしようとしたこと、定住化過程にあった遊牧集団の現地政権に対する継続的な抵抗が、その一致を掘り崩していったのである。より多様な主体に注目することで、帝国権力と現地社会との関係の非対称性、帝国権力・現地社会双方の内部の関係の変化、その背景にある主体間の利益の一致や競争という要素が、とりわけ 1910 年代の灌漑技術の革新と資本の導入の試みの過程で複雑に絡み合っていく状況が明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①塩谷哲史「ハンと企業家—ラウザーン荘の成立と終焉 1913-1915—」『東洋史研究』71-3、2012 年、58-84 頁、査読有。

②塩谷哲史「帝政末期アムダリヤ流域の灌漑利権問題に関する一考察—ラウザーン荘設立をめぐるロシア＝ヒヴァ・ハン国関係の変遷、1913-1915 年—」『メトロポリタン史学』8、2012 年、107-129 頁、査読無。

③ Shioya Akifumi, “Istoriia i istochniki legitimatsii vlasti khivinskikh pravitelei iz dinastii Kungrat (v kontekste vzaimootnoshenii s Osmanskoi imperiei),” in *O‘zbekiston Tarixi*, vol. 2 (2011), pp. 73–79, 査読有。

④ Shioya Akifumi, “Irrigation Policy of the Khanate of Khiva regarding the Lawzan Canal (1), 1830–1873,”（『筑波大学地域研究』第 32 号）、2011 年 3 月、115–136 頁、査読有。

〔学会発表〕（計 10 件）

①塩谷哲史「水資源と開発をめぐるロシア帝国権力と中央アジア南部定住地域」日本中央アジア学会 2013 年度年次大会、2014 年 3 月 29 日、KKR 江ノ島ニュー向洋。

②塩谷哲史「ハン、企業家、帝国—ラウザーン運河をめぐるロシア＝ヒヴァ・ハン国関係の変遷 一八七三-一九一七年—」内陸アジア史学会 2013 年度大会、2013 年 11 月 2 日、龍谷大学。

③ Shioya Akifumi, “Urgench: A Commercial Link among Sedentary People, Nomads, and Russians,” 13th Conference of the European Society for Central Asian Studies, August 6, 2013, Nazarbayev University.（カザフスタン）

④ Shioya Akifumi, “Alfalfa Export in the Khanate of Khiva: A Short History of the Industrialization of Agriculture in the Khorazm Oasis, 1903–1914,” British Association for Slavonic and East European Studies (BASEES) and International Council for Central and East European Studies (ICCEES), European Congress “Europe: Crisis and Renewal”, April 7, 2013, Cambridge University.（英国）

⑤ Shioya Akifumi, “Archival Sources and Modern Central Asian History: Beyond Dichotomous Approaches,” The DAAD Tsukuba-Tübingen Partnership for Central Eurasian Studies Round Table: Research Trends and Methods in Central Eurasian Studies, March 26, 2013, University of Tsukuba.

⑥Shioya Akifumi, “*Povorot* and the Khanate of Khiva: A new canal and the birth of ethnic conflict in the Lawzan, 1870s–1890s,” The Russian Conquest of Central Asia: An International Workshop, November 23, 2012, University of Liverpool.（英国）

⑦Shioya Akifumi, “The Development of the

Diversion Plan of the Amu River: Some Incidents along the Lawzan Canal in the Khanate of Khiva in the 1860s–1890s," Central Eurasian Studies Society Third Regional Conference, July 21, 2012, Tbilisi State University.（グルジア）
⑧Shioya Akifumi, "Outbreak of Water Conflict in the Central Asian Oasis from a Historical Perspective: A Case Study of Khorazm in Modern Times," 7th Annual Conference of Asian Studies Association of Hong Kong, March 2, 2012, Hong-Kong Shue Yan University.（中国）
⑨塩谷哲史「アムダリヤの水を誰が管理するのか—帝政末期ロシア＝ヒヴァ・ハン国間の灌漑利権論争」メトロポリタン史学会第 7 回大会、2011 年 11 月 26 日、首都大学東京。
⑩塩谷哲史「イチャン・カラ博物館蔵 3894 文書の成立とその背景—20 世紀初頭ヒヴァ・ハン国における灌漑事業の諸問題—」第 9 回中央アジアの法制度研究会、2011 年 6 月 25 日、京都外国語大学。

〔図書〕（計 3 件）
①塩谷哲史「ヒヴァ・ハン国と企業家—イチャン・カラ博物館の一勅令を手がかりに」堀川徹、大江泰一郎、磯貝健一編『シャリーアとロシア帝国—近代中央ユーラシアの法と社会—』臨川書店、2014 年 3 月、59-77 頁、分担著。
②塩谷哲史『中央アジア灌漑史序説—ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡—』風響社、2014 年 2 月、単著、302 頁。
③Shioya Akifumi, "Who Should Manage the Water of the Amu Darya?: Controversy over Irrigation Concessions between Russia and Khiva, 1913-1914," in P. Sartori (ed.) *Explorations in the Social History of Modern Central Asia (19th-Early 20th Century)*, Leiden: Brill, August 2013, pp. 111-136, 分担著。

６．研究組織
(1)研究代表者
塩谷　哲史（SHIOYA　Akifumi）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：30570197